
Blossom番外編

朔野 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blossom番外編

【Nコード】

N2349BA

【作者名】

朔野 凪

【あらすじ】

『Blossom』の番外編シリーズ。各編で時系列が前後するので読む際はご注意ください。（Pixiv、小説サイト『emotional sentence』にて公開中）

V a l e n t i n e s h o r t (前書き)

キス（軽いもの）までの表現があります。

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。

ご了承の上お読みください。

時系列的には、桃歌1年、サキ2年、年明けて2月です。

V a l e n t i n e s h o r t

「あ……」

忘れかけていた。

こんなことを言ったら日本中の女の子達に白い目で見られてしまうかもしれない。

調理室の前を通りかかったときに目に入った、『バレンタイン』の文字。

追い出しコンパの公演の準備で忙しくて、全く頭の中を素通りしていた大切……であろうイベント。

そつえば、女子ダンス部の方はバレンタイン公演もやるんだっ

た。

最近どことなく男子ヒップホップ部内の雰囲気を変だと思ったのは、これのせいだろう。

サキ先輩、渡さないとへこんじゃうだろうなあ……。

一度も本命だとか、異性に渡したことがない。

女子との友チョコですら、最近は微妙な感じになっているくらいで。

あの四人がバレンタインでどれだけ大変なことになるかは、容易に想像ができた。

それでも、きっと彼らは私一人のチョコを求めてくるだろう。

……考えておかなきゃなあ。

「いたいた！ 桃ちゃん、先輩達探してたよ？」

半ば放心状態でぼーっと廊下を歩いていた私に声をかけたのは、

木田 梢君だった。

入学当時は割と落ち着いていた外見も、今じゃあもうオシャレ君の域にまで達していた。

「え？ 私、ちょっと遅れるって言うておいたはずんだけど……」

授業のプリントを提出しなければならぬ用があった。

梢君は、あれ？と言って、頭をかいた。

「じゃあ、何かあったのかな……。とりあえず、できるなら早く行った方がいいかも」

「そっか。うん、ありがと」

わざわざ、きつと自分から私を探しに来てくれただろう梢君に感謝しなければならぬ。

「あ、そのプリント出しとこうか？ 化学のやつでしょ」

「いいの？ ありがと」

そう言って爽やかな笑顔をを見せて、梢君は走り去って行った。

昇降口に急いで降りると、先輩たち四人の他に、一人、小さな女の子が立っていた。

「信じません！ あたしの目の前でキスしてくれるまで！」

涙声でそう叫んだ彼女は、赤い目と頬でサキ先輩を力強く見つめていた。

これは……えっと……。

修羅場というやつだろうか。いや、ちょっと違うかもしれない。

とにかく何だかすごく行きづらい雰囲気だったのを頑張っ振り切って、さっきの台詞は聞かなかったことにして先輩たちの方に駆け寄った。

「すいません！ 何か、用でもありましたか？」

平静を装いつつ、目の前の女の子を見て見ぬふりをしながら声をかけると、サキ先輩が慌てて私の手を掴んだ。

焦ったような半分苦笑いの顔を近づけて、そっと囁いた。

「ゴメン、ちょっと色々あって」

私の体を力強く引き付けて、唇をそっと触れさせた。

本当に軽い、軽いもの。

近くで悲鳴が聞こえたと思ってびっくりして顔を上げると、女の子がその場に泣き崩れていた。

ごめんなさい……。えっと、色々と。

「そういうことだから、ごめんね」

サキ先輩も困ったようにそう言った。

しかし、女の子は聞こえていないかのように、うそ、と呟きながら泣き続けるだけだった。

遂に水瀬先輩が傍に寄ってそつと女の子の頭に手を置いた。

「つたく、泣かしてんじゃねえよ。……大丈夫？ 元気出して」

驚くほどに優しい声と笑顔でそう言った。

それでも泣き止まない彼女に、水瀬先輩はポケットから何かを出して差し出した。

「レモンタブレット……食べる？」

少々場違いのように思えたその言葉で、女の子は顔を少し上げて不思議そうに首をかしげた。

水瀬先輩はいつものものへらつとした調子を孕んだ笑顔で無理やりタブレットを彼女の手のひらに押し込んだ。

「マナちゃん、だよ……。俺に、誕生日プレゼントくれたでしょ」

彼の言葉に、女の子ははっとして顔をすっかり上げた。

「どうして……わかったんですか？」

本当に不思議そうに問う彼女に、水瀬先輩はウィンクして唇を舐めた。

「紙袋、かわいかったから、もらう前に見ちゃってた」

大きな目を更に見開いて少し嬉しそうに彼女は笑った。

強く握り締めていた手の中のタブレットを優しく握りなおして、髪を整える。

「あの……あたし、最初は、芳花先輩のことが好きでした。でも、みんながダメって言うから、どんどん揺らいじゃって……」

ふわふわしていて背も小さくてかわいい印象の彼女は、他のクラスだったから知らなかったけれど、すぐく友達になりたくなった。

彼女の言葉を聞いて、水瀬先輩は意味ありげに笑った。

「サキはわかった通りにヘタレだから、俺にしときなって」
それって……。

と、私が思ったのとは裏腹に、女の子にはその言葉の意味がよくわかっていないみたいだった。

「俺のこと……まだ好き？」

私でもドキドキする、あの甘い声で恥ずかしげもなく問うた。

「……っはい！ でも、あの……」

たじろぐ彼女を尻目に、水瀬先輩はいきなり女の子を抱きしめた。小さく悲鳴が聞こえたが、それは嫌なものでは決してなかった。

「じゃ、そういうことだから……サキのことなんかで、泣いてんなよ」

優しい声でそう言って、彼女の頭を優しくぽんぽんと叩いた。

予想外の展開、というか、水瀬先輩の行動に啞然として辺りを見回すと、やはりサキ先輩と、その場にいた隼先輩、琴先輩もびっくりしていた。

そもそも、どういうことが最初にあつたのか、私はまだ知らなかった。

こっそり隼先輩に何があつたのか聞くと、サキ先輩にこの女の子が告白をしたが、彼女がいると言って断った。しかし信じなかった、ということらしい。

でも、彼女は水瀬先輩のことが好きで……？

何だかよくわからなくなってきたけれど、色々とあるのかなあ、と割り切ることにした。

その後、何だか気まずい雰囲気の中、水瀬先輩だけ彼女と一緒にしばらく話すようなので、他の先輩と四人で帰路についた。

「あ！ ねえねえ、桃ちー、バレンタインちよーだいね！」

「え、あ、はい」

なんとなくボーっとしながら、何を話すでもなく歩いていたとき、急に琴先輩が声を上げてそう言った。

そっか……またもや忘れかけていたけれど、バレンタインか……。

「桃歌ちゃん」

自分の世界にまた浸りかけていると、サキ先輩が私を呼んで笑った。

その後は何も言わないまま、笑顔で見つめてきて……えーっと。

「さ、サキ先輩にも勿論渡しますからね!？」

怖いというかそういう問題ではなく、それは大前提であろうに。

琴先輩に先手をとられたのがそんなに悔しかったのか、機嫌がちょつと悪いときの常のように、変な調子だった。

ホントに、何がいいかなあ。

「そうだ……去年の経験から、当日の昼はもらいものの消化になりそうだから、覚悟しておけよ」

隼先輩の言葉に、私は驚きながらも納得してしまった。

だって、すごそうなもの……。

漫画みたいにバレンタインにたくさんもらってる男子なんて見たことないけれど、先輩たちは確実にそうなるだろう。

「うん……考えておきますね、楽しみにしててください」

何だか結構楽しみになってきた。色々と。

先輩たちの人気は、私の予想を遥かに上回っていた。

朝から先輩たちについていたが、昇降口に着くまででもう私はへとへとだった。私自身は特に何かしていたというわけでもないのだけれど、あまりの人の多さに気疲れしてしまった。

中にはクラスの友達もいたし、とにかく一年生から三年生まで多種多様な女の子が次々と先輩たちを引き止めては渡して去って行く。何故か男子生徒もちょこちょこいた。その理由は後で知ることになるんだけど。

「なんか……去年よりすごくないか……」

テンションの高い琴先輩や水瀬先輩とは逆に、サキ先輩はもううんざりという感じだった。

本当に『持ち切れない』チョコの山である。イケメンっていうのは怖いと思った。

とにかく、引き止められすぎて時間が危なくなっていたので、私は先輩たちと別れた。

昼休みになつて中庭に行くと、先輩たちと、この間の女の子、そして……ぱらぱらと見知らぬ生徒。

「基山ちゃんきたきた。聞いてくれ！ マナちゃんと付き合うことになった！」

マナちゃん、というこの間の小さくてほわほわした女の子は恥ずかしそうになつてこりと笑った。

「宮間^{みやま} 麻奈^{まな}です。よろしくね」

「あ、えつと、基山 桃歌です。こちらこそ」

麻奈ちゃんは女の私から見てもとにかくかわいらしかった。

高めの声も小さな顔も大きな瞳も。

見とれる、とはちよつと違うけれど、彼女を見つめていると、ほわほわした気分になる。

クラスは違つたし全然話したことがなかったけれど、少し打ち解けて少しずつ話をしていると、何だか辺りが騒がしくなってきた。

「はいはい、ちよつと待てつて」

何やら隼先輩が何か配っているみたいだった。

当人は忙しそうなのでサキ先輩に聞いてみると、彼はああ、と言いながら頭をかいた。

「隼特製のチョコレートケーキ。去年、色々あつて一部の先輩に配つてただけど、それが評判になつちゃったみたいなんだよ」

お菓子作りもうまいのか……と思うと、何だかもうお手上げの気分だった。

よく見ると、隼先輩のケーキをもらいに来てる人は、全員朝にチョコを渡しに来た人で、男子もいた。

男子生徒は、このために渡したんだろうか……？

「桃ちー、サキ、水瀬とマナちゃん、隼忙しいし食べちゃおうぜー」生徒の列を見ていたら、琴先輩が元気よくそう言った。

いつもお弁当を食べているレジャーシートの上にはいつもより小さな重箱と大量のラッピングされたチョコレート……。

まさか、これ今全部食べるなんてことはしないよね……。

後ろで見ていた麻奈ちゃんがうわあ、とかわいい声を上げた。

「うし！ 張り切っていこー！」

水瀬先輩が急にそう言ってどかっと座り込んだ。

「はい、こっちな、基山ちゃんも含めて『皆さんで食べてください』って言われた方。それ以外は一応俺らが一口は食べないとな」

そう言っただけで麻奈ちゃんにいくつか手渡した。

どれもこれもなんだかすごく凝っていて、私的な感想としては、本命かよ……というところだった。

それでも『皆さんで食べてください』っていうのは、厚意なのか、捨てられるよりはマシと思っているのか。

先輩たちは捨てたりはしないだろうに、ね。

「これサキの分。こっちは水瀬な」

大きな紙袋に早くも一杯のチョコを見て、苦笑しつつもサキ先輩も水瀬先輩も嬉しそうだった。

バレンタインって、やっぱり男の人にとってはもらったら何でも嬉しいのかな。

ちゃんと私も作ってきたけれど、正直自信なんてあるわけない。

まずいものを作ったつもりはないけれど、突出しておいしいようなものではないし、個性もないし。

「桃歌ちゃん……どうしたの？」

麻奈ちゃんが遠慮がちにチョコをつまみながら心配そうに声をかけてくれる。

ついつい暗い顔でもしてしまったのかもしれない。

「あ、ううん、何でもないよ。ちよっとだけ、考え事」

取り柄がないことが取り柄と言い張ればどれだけ楽なものか。

今後後悔したって今から特技を作るわけでもなしに。

「あのね……あたし、製菓部なんだ。でもね、別にお菓子作るのうまくないよ」

麻奈ちゃんはやっと恥ずかしそうに肩をすくめた。

「先輩たちがもらったチョコはどれもおいしいし……あたしも自信がないんだ。でも、多分ね、味じゃないし、愛情もちよっと違うんだと思うの。形式的なものだとしても……あげることが一番重要なんじゃないかって」

彼女の言葉が私の耳を通して脳に響く。

そう、なのかな。

自信を持っていかなきゃ、というのは、ずっと前にクリアしたはずの課題だった。

だから、卑屈になる気はなかったけれど、半信半疑に近い自信でもやもやしていた。

「あたしが……先輩にとつてどれだけ特別かわからないけれど……あたしがね、先輩にタブレットもらったとき、すごく嬉しかったから、同じ気持ちならいいなって」

あの時のレモンタブレットのこと。

私は、何度も何度もサキ先輩にたくさんものをもらっている。確かに、すごく嬉しかったと思う。

「……そうだね」

悩むようなことでもなかったけれど、麻奈ちゃんのおかげで気にすることもなくなった。

ふと水瀬先輩を見たら、彼の麻奈ちゃんを見つめる瞳はとても穏やかだった。

放課後、私は内心とてもときどきしていた。

部活があるから、終わってから渡すことになるだろうけど、実を言うと異性にチョコを渡すなんて初めてだったのだ。

なんとなくこの後のことを考えてしまって、練習中も挙動不審に

なってしまう。

最後の休憩に入ったとき、見計らったように教室のドアが開いた。おずおずと入ってきたのは、サキ先輩のお姉さんたちよりもずつと綺麗な、本当にこの世の人間とは思えないほどの美人だった。

一度見たら忘れないほどの。

「咲哉くん、」

凜とした声で、彼女は彼を呼んだ。

彼ははっとして振り返ると、私の方をちらっと見てから顔をしかめた。

「……お久しぶりです」

三年生で、美人で、サキ先輩と交流が深い。

もちろん、わかっている……。これまでに何度も、彼女の姿は見てきたから。

「私、咲哉クンにチヨコ渡さなくちゃって思ってた。去年は結局渡せなかったから……」

憂いを含んだ笑みも綺麗な彼女は、教室内の人間の視線を一点に受けていたのに、たじろぎもしなかった。

それだけ見られ慣れているのだろうと、自然にそう思った。

持っていた小さな紙袋をそっとサキ先輩に差し出すと、綺麗に笑った。

きつと自然な笑顔なのだろうけれど、それは作り物のように綺麗すぎた。

サキ先輩もそっとそれを受け取って、小さく感謝を述べた。

異様な沈黙の中、彼女は急に私の方を向いてにっこりと笑った。

「ごめんね。諦めが悪くて……。咲哉クンの方は、もうすっかり私に気はないのに」

皮肉にも聞こえる言葉。しかし、悪気があるようには聞こえなかった。むしろ、自分を嘲笑う響きを含んだ言葉に、身震いがした。

私は、ひとつ首を横に振ることしかできなかった。

怖い、とは少し違う。

しかし、何事も入る余地のない何かが彼女の周りにはあったように思える。

あの人、万人を魅了しながらも、事件に巻き込まれて立場を失くした、いわば悲劇のヒロインだったなんて。

私がこんなことを思うのはおかしい。そう思って首を振った。サキ先輩が私のことを心配そうに見ていたけれど、見ないふりをした。

別に、大丈夫だから。そう自分に言い聞かせて。

「お疲れ様でした」

練習に集中して、なんとか先ほどの憂いを振り払った。

そして、あれほどまで緊張して仕方なかった下校の時間になってしまったのだった。

サキ先輩は、何も言っていないけれど、きっと期待してくれているだろう。

私が自信を失くしていたら、何だかいけない気がする。

コートを着てかばんを持ち、帰る支度の整ったサキ先輩におそろおそろ駆け寄る。

「あの……っ」

何故だかすごく鼓動が速くなった。

自分から告白でもするような緊張。

サキ先輩は優しく目で尋ね返す。

「私の…… チョコ、です」

うつむいてしまったが、そのまま箱を差し出す。

受け取られないことに不安を覚えたが、次の瞬間には腕を引かれていた。

いつもの、優しい抱擁だった。

「ごめんな、たくさん悩ませてたのに、無視しちゃって」

そんなことを言ってくれるのが嬉しかった。普通は気にしなくていいことだ。

花の香りに包まれて、そして彼の暖かさと、頭を撫でてくれる感触。

それだけで、幸せだった。

「ありがとう。すっげえ嬉しいから。安心して」

たまに見せる、余裕のない言葉遣いと笑顔。

それは、彼が素直に感情を表現するときの特徴だったから、私は本当に嬉しかった。

腰をかがめて、顔を近づけてくる。

彼の端整な目、鼻、口、全てを私の視界に独り占めしている。

そう思うと少し照れくさいと共に、この上ない幸せを味わった。

サキ先輩は茶目っ気を含ませて笑ってひとつウインクをすると、この間とは裏腹にしっかりと唇を重ねてきた。

キスというのは、何でもないように見えて、どうしても甘いのだらう。

近すぎてぼんやりとしてピントの合わない瞳で見るのを諦めて、そっと目を閉じる。

それでも彼の笑顔が浮かんでくるのだから、恐ろしいものだった。

少しの間そうしていて、どちらからなく離れた。

私の右手をしっかりと握り締めて、サキ先輩は頷いた。

もう先に昇降口に向かってしまった先輩たちを追いかけて、急ぎ足で階段を下りる。

下で待っていた先輩たちは、三人とも呆れたようなにやけ顔を浮かべていて、私もサキ先輩も恥ずかしくなったものだった。

「あの、先輩たちにも」

そう言っただけでそれぞれにチョコを渡すと、みんな笑ってありがとう、と言ってくれた。

隼先輩にはその場でケーキを返してもらったけれど、本当においしくて、ついついテンションが上がって色々聞いてしまった。

いつもの調子でハグを仕掛けてくる琴先輩を（サキ先輩の視線が

怖いので）上手に避けながら、水瀬先輩と麻奈ちゃんの話をして笑った。

ホワイトデーは、卒業式、つまり追い出しコンパの直前。

……覚えていてくれたらいいな、と思って、ひとりで笑った。

White Day short (前書き)

キス（軽いもの）までの表現があります。

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。

ご了承の上お読みください。

時系列的には、桃歌1年、サキ2年、年明けて3月です。

White Day short

冷たい空気の中、桜の木は蕾をたたえている。

桃が咲いたと、サキ先輩はお姉さんたちからの桃を持ってきてくれた。

水瀬先輩の髪色も「春カラー」と言って少し変わった。

黒くなってきた琴先輩は、それに便乗するようにばっさり切って黒髪になった。

黒といつても、隼先輩と比べると茶色っぽいのだけけど。

サキ先輩はいつもカンペキにまだらにもならないんだけど……。ちよつとそれを水瀬先輩に言ったら、私のためにやってくれて、と教えられた。

そんなこと、気にしないのに。

「気づいてないことないだろ？ アイツ、負けず嫌いだから、基山ちゃんにはちよつとでもカツコ悪いトコ見せたくねえんだよ」

確かに……そうなんだけど。

彼は、何もなくても十分すぎるほどにかっこいいのに。

「基山ちゃん……サキはサキで好きなのはわかってるけど、こんな環境だ、どつからどーなるかわかんねえよ。不安になるさ」

いつつもいつつもこんな話ばかりで、水瀬先輩に迷惑かけちゃってるかな、と思うけど、そんなこと言っても水瀬先輩は笑った。

「妬いちゃうねえ。何度も何度も言うけど、サキは基山ちゃんといっぱいイチャイチャしたいがために色々苦労してんだからな」

「で、でも、四月からは先輩たちも三年生だし、そんなに気にかけるなくていいんですからねっ」

「わーかってるよ。でもな、やりたくてやってんだから、口出しされるのはツライぜ？」

ブーツで器用にくるりと回って、反論できないウィンクを向けたから、私は口をつぐむしかなかった。

「あの、草野先輩は……卒業、楽しみですか？」

たまたま乗った電車で、草野先輩と会った。

だから、ずっと気になって……いや、不安だったことを聞いてみた。

眼鏡の向こうで真剣に考える瞳を見ると、何だか少しだけ申し訳なくなってきた。

私にとっては重要かもしれないけれど……彼にとって、それを言うことは、どういうことなのか。

「楽しみ……かな」

さんざん考えて発された言葉は、普通の答えだった。

「不安の方が多いこともあるかもしれないけど、これまでのしがらみを一新できるっていうのが……なんか、ね」

らしくなく少しはにかんだ彼を見て、少しだけ不思議な気持ちになった。

当たり前前の考え方で、当たり前前のことを言っている。

だけど……。私は、何を期待していたんだろう。

「私は、先輩が卒業しちゃうの、不安ですからねっ」

何が言いたくてこんなことを言い出したのかわからなかった。

でも、草野先輩は冷静な視線の中に暖かいものを含んで、微笑みかけてくれた。

「当たり前だよ。俺がこういう風に思うのも当たり前。だけど、何が起こるかわからないからだ。……良い事があつたら、不安に思わないだろう？」

サキ先輩との出会い。合宿。文化祭。……クリスマス。

不安なことばかりだった。でも、必ず良い結果は導き出されたではないか。

「そう、ですね」

私の心配がほとんど杞憂に終わっているのは、サキ先輩や、他の先輩のおかげだ。

「もう大丈夫だよ。……基山ちゃんは、一人前だ」

「ありがとうございます」

寡黙な草野先輩がたくさん話してくれたのも、嬉しかった。追い出しコンパ、私は全然役に立ってないかもしれない。

でも、でもね。

一人で、色々できるようになったんだもの。

私は一人じゃないけど、一人でもできるよ。

「え！？ し、知らなかったんですけど……」

ホワイトデー大感謝祭。

人気投票＋握手会。部員全員参加（三年除く）。

「ああ。だってヒミツにしてたからな」

少しからかうように言った隼先輩をちょっと睨もうとすると、彼は笑って返した。

「チビはやることないから。座っててくれればいい」

「え？」

「いつものお礼……だよ」

向こうにいるサキ先輩を指して言った。

それが、こんな些細なことが、こんなにも嬉しいことなんて。

「去年は人がたくさん来た。いるだけで気疲れするかもしれないが

……受付、頼む」

「……はい！」

嬉しいよ。みんな感謝してくれているのはわかっているけれど、みんなのために頑張っているつもりだから、逆にしてくれると、本当に嬉しい。

「ありがとね」

「ありがと」

「アリガト……」

「ありがとー！」

やっぱりたくさん来た女子生徒。

中には男子生徒もいた。ヒップホップ部って、やっぱりすごいんだなあと再確認する。

「すいません」

先輩たちの様子を眺めていたら、男の子に呼び止められた。

「はい？」

「基山さん、握手してください」

何かあったかなー、なんて思ってた返したら、そう言われて一瞬固まる。

えーと……どうしよう、かな。横目見たサキ先輩は見えていなかったから、おずおずと立ち上がって右手を差し出すと、彼は暖かな大きな手で握った。

恐る恐る見上げた先で、彼は人懐こい笑顔を見せた。

「カワイイなあ。ほんと」

「え、え？」

何だかものすごく嫌な予感がしたのでそーっと手を離して体を離すと、男の子は苦笑いをした。

「安心して下さいって。ただのファンだから」

証拠に彼はなーんにもしてこなかったけれど、どきどきはなかなか収まらなかった。

「は、はい……」

顔赤いだろうなあ、と思って顔に当てた手が、やっぱりひんやりと気持ちよかった。

「基山さんさ、やっぱり松岡先輩が一番好きなの？」

男の子は再度座るように促してフランクに問いかけてきた。

困惑しつつ小さく頷く私に、まあ、そうだよーね、と返す彼は少しさびしそうだった。

「あの……」

どうすればいいかなあ。私に、何ができるのか。

「ん、ごめん！ これから、友達になってくれたらなあなんて思っ

てただけだから。じゃね」

友達に、なんて言ったのに、引き止める暇もなく彼は去ってしまった。

机の上に、小さな包みをこっそり残して。

「結果、どうでした？」

「まだわかんないけど……二年はみんな伯仲だよ。そんなもんさ」
とりあえずの開票と片付けを終えて、やっと暇そうになった琴先輩に聞くと、そう言っただけで笑った。

「そうそう！一年な、梢がだいぶ頑張ってるよ！」

私が梢君とちょっと仲良くしてるのを知ってるから、琴先輩はそう教えてくれた。

梢君、まじめだからね。

「俺ら、サキだけあんまり人気でも、全然気にしないからな。桃ちーがどーんなにかわいくても、サキに妬かないからな！」

無邪気に笑って言った琴先輩に、何故だかとても安心した。

「だって俺らもサキかつこいいって思うからさ。俺、サキが憧れなんだよ」

不器用に優しく。かつこいいのは外見だけじゃなくて。

おかしいくらいに過保護で。ダンスのときは別人みたいに輝いてて。

こんなにも近くにいるのに、彼はたくさん人の憧れを受けて、それなのにあんなに普通に過ごしているんだ。

そう考えると、すごい、かな。

「そーだ。桃ちー、俺らからお返し、ちゃんとあるからな」

頬杖をつきながら物凄く明るく笑った琴先輩を見て、バレンタインあげた甲斐あったかなあ、なんて今更思った。

彼自身が、とても楽しそうだったから。

基山さんへ

本当に唐突にごめん。下心も何にもないから安心してくれると助かる。

知らないかもしれないけど、俺は隣のクラスの高谷。諦めたっつーか、なんとも言えないんだけど、基山さんに対してそういう感情じゃなくて、ただ単純に仲良くなりたいたいと思う。

だから、これからよろしくって意味で。

松岡先輩とは、お幸せに。

高谷 樹

あの男の子……高谷君の置いていった包みには、こんな内容の手紙と、カップケーキが入っていた。

先輩に見つからないようにこっそり開けてたけど、隼先輩には見つかってしまったので事情を説明した。

用心するに超したことはないけど、とりあえずは別に大丈夫かなあ。

友達が増えるのは、悪いことではないし。

隼先輩からは、ホワイトチョコのケーキをもらった。

やっぱりびっくりするほどおいしくて、手作りとは思えなかった。水瀬先輩はちよつとしたアクセサリー。

さすがのセンスですごくかわいいものをくれて、でも心が躍ったなんて本人にはとてもじゃないけど言えなかった。

琴先輩も髪留めをくれたけど、すごく考えてくれたって言うから、すごく嬉しかった。

サキ先輩は、含み笑いのような微笑みを向けて、後でね、と言った。

「今日、時間ある？」

帰り道で、ふと投げかけられた質問にとっさに頷くと、サキ先輩は安心したように笑った。

「よかった。ちょっとさ、家まで来てくれると嬉しい」

もう何度か行ってる、サキ先輩の家。

また綺麗なお姉さんたちと会えると思ったら、こういう日じゃないくても純粹に嬉しかった。

「勿論行きます」

つないだ手の温もりを直に感じられるから、手袋はしないほうがいい。

もう温かくなり始めた気温には、必要ないのかもしれないけれど。

「お邪魔します」

「ただいま」

花屋の奥、まだ花の香りの残る玄関を通って、家の中へと入る。前を歩くサキ先輩の背中で見えなかったけれど、声からしてお姉さん達は二人はいるようだった。

そのままサキ先輩の後をついて、彼の部屋と思しき部屋まで来た。「ちよつと座って待ってて」

そう言われたので、私はおずおずと床に座ってカバンを下ろした。綺麗に整理されていて、男の人の部屋とは思えないようなサキ先輩の部屋は、それでも彼らしいなあ、と思わせるところもたくさんあった。

着飾らないけど、それでいてオシャレでカッコイイ。

部屋に戻ってきたサキ先輩にも気づかず、部屋を眺めまわしていたから、突然背後から伸びた腕と、そこに抱えられた花束に心底驚いてしまった。

「あはは。ごめん、驚かすつもりはなかったんだけど」

そう言って、でもそのまま花束を私の手に渡して、後ろから抱きしめた。

薄い桃色と、黄色が中心となっている、綺麗でかわいい花束。

「いつもありがとう。俺は、桃歌ちゃんがいなかったら、ここまで心から充実してると言える生活はできていなかったと思う」

温かい腕の中で、彼の気持ち、本当に素直に伝わってくる。
目の前の花束だけじゃない。彼自身からする良い香りが、伝えてくれる。

「私の方こそ、本当にありがとうございます」

こんなにも、平凡で仕方のない私が、自分の背丈を伸ばして頑張るうって思えたのは、こんな風な環境にいたことができたのは、全てはサキ先輩のおかげだった。

振り返ったすぐその彼の表情は、とんでもなく幸せそうだったから、ついつい、顔が綻んだ。

「大好きだから」

細められた瞳の向こうで、私はどんな顔をしているかな。

サキ先輩と出会わなければ、こんな幸せは、感じられなかった。彼もそう言うかもしれない。でも、私にとってはそれは真実だったから。

綺麗に微笑む彼の抱擁に身を委ねて、甘い香りに包まれる。

お決まりのパターン、と言ってしまえばそれまで。

こんなことに意味が見出せるのは、自慢できることだ。

大好きだから。

たったそれだけで、幸せになれるのは。

「大好きだからです」

目を閉じて感じた温もりからも伝わってくる、優しい笑顔。

一年間、彼と過ごして、大変なこともたくさんあったけれど。

これほどまでに幸せなもの、全て彼のおかげだったから。

感謝の気持ちを伝えたいのは、こちらの方のはずだったんだけど。

「先輩、あの……」

高谷君のことを話そうと思った。

いつも、こういう話は隼先輩に聞いてもらっているけれど、それは逃げでしかなかったかもしれない。

甘えて、頼っていい、と言ってくれる先輩たちだけど、それは適度の問題だ。

「友達になりたいって、男の子に言われたんですけど、どう、思いますか……？」

サキ先輩は、意外にも軽く微笑んで、私の頭に手を置いた。

そして、少しだけ言葉を探すように首を捻って、ゆっくりと口を開いた。

「桃歌ちゃんの良い子だからさ、俺もダメって言えないっていうか……」

ああ、そっか、って誰もが思うような苦笑を浮かべて、サキ先輩は続けた。

「悔しいし、妬いちゃうけど、桃歌ちゃんが、俺のこと」

「だ、大好きです」

聞く方が恥ずかしいかもしれない！ そんな風に思っ、つい口走ってしまった。

驚いた顔でまた笑った彼を見て、顔が熱くなるのがわかった。

墓穴を掘ってしまった……かな。

ちよつと後悔している私をヨソに、サキ先輩はゆっくりと私の頭を撫でた。

嬉しそくに笑う彼を見て、私も嬉しくなったので、もういいことにした。

「そ、だよね。……ん、アリガト」

私がもし、いくら高谷君と仲良く話す時間の方が、サキ先輩との時間よりも長くても、気持ちが変わらない。

というよりは、そんなことがあったら、もう私は死んでしまいかもしれない。

そう思えるほどに、今の生活で欠かせるものなんてなかった。いつだって、そうだったと思える。

X・mas2011 - プロローグ (前書き)

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

このプロローグは、Blossom番外編「X・mas2011 - 隼『兄じゃなくて』」、Blossom番外編「X・mas2011 - 水瀬『抱えた秘密の重み』」に繋がります。
(パラレルワールドです。)

X・mas2011 - プロローグ

気温はかなり低くなり、日も短くなって、街のいたるところではクリスマスソングが流れている。

色々あった今年も終わりに近づき、そして、多くの人が楽しむ日が目前に迫りつつある。それは……クリスマス！

毎年、一人だから寂しい、なんてことはなくて、友達とか家族と一緒に過ごしているから、私にとって一緒にいるべき人ができた今年が特別というワケでもないけれど……。やっぱり、期待はしてしまっ。

お母さんたちや水瀬先輩とかに茶化され始めたけれど、私はなんだか聞けないでいた。サキ先輩の予定、なんて。

「早く予約とつとかなないと、彼女だからって一緒にいられないかもしれないぜ？」

「そ、それはないっ……！ と、信じますっ」

冗談だっってわかってるけれど、彼と過ごしたいと思っている人が少なくないのは事実だろう。

「ま、そのときはフリーの水瀬くんが拾ってやるぜ、子猫ちゃん」

私は一層キザ度に磨きのかかっていた水瀬先輩のからかいの全てを受け流すことができなかった。

不安に思っているのも、また事実だから。

先輩たちとの会話を思い出して、ベッドの上で一人うなだれる。

でも、いまだに何も言ってくれないサキ先輩のことを一人で心配しまくっていても仕方がなくて、私は彼に早く聞くべきだと思った。うじうじとケータイを開けたり閉めたりを繰り返してためらっていると、ちょうど手の中のそれが着信を告げた。

「も、もしもし？」

タイミングが良いのか悪いのか、サキ先輩からの電話に焦って声がかかり上ずってしまっ。

「もしもし、咲哉だけ……。桃歌ちゃん、ゴメンっ！」

申し訳なさそうに始めたサキ先輩は、存外に明るい方に深刻そうに謝罪の言葉を述べた。

「え、えつと、はい？」

「その……クリスマスの日、予定空けといたんだけど……。姉さんたちに手伝えって捕まえられちゃって。売り込み落ち着くまで、抜けられそうになくて」

半分くらい実現してしまった水瀬先輩の言葉に、私は呆然としてしまった。

そ、それじゃあ私は。

「本当にゴメン。言い訳のしようもない。でも、なるべく早く抜けられるように頑張るから。夕方くらいからは、ずっと一緒にいようかな？」

無言の私の絶望を読み取ったのか、サキ先輩は優しい口調でなだめるようにそう告げた。

サキ先輩は全然悪くなくて、だって家の事情だから……。でも、少なからず期待をしまっていた私は、やっぱりへこんでしまっていた。

「ごめんな。最初に直接謝れないのも……。その代わり、終わったから、たくさん楽しませるから！」

「わ……かりま、した。仕方ないですからっ」

でも、だって……という不満と、サキ先輩も辛いはず、という苦心の中の諦めがせめぎ合って、素直な言葉が口から出なかった。

お決まりの言い回しで電話を切って、私はベッドに倒れこんだ。今まで、何があったって彼は私を優先してくれていたように思うから、こんなことがあるなんて、思ってもいなかったんだろう。

温かくもない布団を抱きかかえても、空しくなるだけで。

「ええー！？ サキひつでえ。っていうかなんていうか、ええー？」
珍しく、琴先輩だけが駅にいたので、久々に琴先輩と二人で登校

することになった。早速あんまり元気がないことを目ざとく指摘されて、昨日のことを彼に話すと、私が外に出せなかったような純粋な感想を吐き出してくれた。

「隼とかから手エ回してもらえないのかな？ サキの代わりに店手伝うとかさー」

「どうなんでしょう。サキ先輩がまだそんなことも考えてないとは思えませんけど……」

あの頑固な彼が、何も考えずに、何もしようとせず、自分のしたいことと反することをするとは思えなかった。

なんてことも、私が自分の都合の良いように考えてるだけかもれしなかったけれど。

「……でも。したら俺、桃ちーとデートしたいな！ 寂しいからとかじゃなくてさあ、サキつて鬼がいないうちにっ」

「はいはい、桃歌チャンはみんなのマネだ、みんなの桃歌チャンだ。独り占めしていいのは松岡だけっしょ」

嬉しそうにはにかんだ琴先輩を後ろから突き押して顔を出した朝斗先輩は、よ、と手を挙げて琴先輩と私の間に割り込んだ。

そしてそのまま私の方を向いたまま、案の定口を尖らせて、「いーじゃんかよー」と不満そうな琴先輩の肩を、彼は子供をなだめるように叩いた。

「話は大体聞いてた。でも、それ言ったら俺も桃歌チャンとデートしたいぜ？ 部員のみんなに言ったら、桃歌チャン争奪戦が勃発するだろうなア」

「……はあ」

本人抜きで進められていく話を止めることができなくて、私は困り果ててしまった。

サキ先輩とじゃなかったら、誰とクリスマスを過ごしたいんだろう……？

確かに私は部員みんなに平等じゃなくちゃいけないくて、サキ先輩彼氏、という特別な立場以外で、特別に一人を選ぶなんて……。

「サキ先輩は許してくれるんでしょうか？」

「アイツが納得するくらい桃歌ちゃんを楽しませればいいんだろ？」

「俺、それなら自信あるよ！」

瓜二つの千種兄弟に完璧な笑顔を向けられて、言葉に詰まる。

「そ、その話は、また後でしましょっ！？」

拳句の果て、苦笑いで誤魔化して、私は二人を振り切るように先を歩いた。

あんなことは言っても、どうしても腑に落ちなかったのか、休み時間に琴先輩に呼ばれて、隼先輩の下へとこっそり訪れた。もちろん、サキ先輩には見つからないように。

「ああ……。クリスマスは花束を売り込むらしいな。サキの集客力は半端じゃないし、アイツ目当てで来る客も多い」

廊下の端に呼び出してもらった隼先輩は、いつものように落ち着いた黒い瞳を私に向けてそう言った。

「隼がなんとかできないのかー？」

「残念ながら、松岡の姉さんたちは笹神の人には花屋の仕事は任せてはくれないな」

それは、彼女たちなりのケジメなのだろう。詳しいことは知らないと言えど、サキ先輩と隼先輩の家に色々とあることは察しがついていた。

そんなことを捻じ曲げるなんて、私に権利のあることじゃない。

「あのサキが折れてるんだ、桃歌もわかってるだろ？ 割とどうしようもないことだ。それに、アイツも辛いさ。姉さんたちの手伝いもしなくてはならないが、お前ともいたいだろう」

「はい……」

「桃ちー、元気出してくれよお」

心配そうにしてくれる琴先輩に笑いかけて、私は自分の教室へと逃げるように小走りで帰った。

琴先輩とのやり取りもあって、すっかり落胆が増幅されてしまつて、私はため息ばかりついてしまっていた。

昼休みになつて、教室の窓から中庭を覗いてみる。

サキ先輩と会つのが、少しだけ心苦しかった。私は、彼を少なからず責めてしまっているから。

「基山」

手すりに手をかけて隣に並んだのは、和真君だった。彼らしい明るい笑顔ではなくて、しかしそれも彼らしい真剣な表情だった。

「大丈夫か？ 今日、ずっと下向いてる」

クラスメイトだからこそ、の彼の気遣いが嬉しかったけれど、私は色々な人に心配をかけてしまったことを一人で悔やんだ。

「うん、全然大丈夫だよ」

自分で言つて強がりになしか聞こえなかったけど、和真君はそれには何も言わないでおいてくれた。

「笑えよ」

そして、少しの沈黙の後、明るい声色でそう言った。

「……え？」

「基山が笑つてくれないと、なんか、スゲー不安になる。何か嫌なことでも起きちまいそーな。……たぶんさ、松岡先輩だけじゃなくて、みんなそう思ってる。だから、元気出せって」

私を元気づけるように笑つた和真君の屈託のない笑顔に、少しだけ心のもやもやがほぐされたような気がした。

「ほら、先輩たち来たぞ。行かなくていいのか？」

「うん、行くね。……ありがと、和真君」

お礼にと笑いかけると、彼は顔を赤くして、そっぽを向いてしまった。

今は……そう、サキ先輩に会いに行かなきゃ。

中庭に下りると、既に先輩たち四人はシートに座っていた。

「あ、桃子ー」

顔を上げた琴先輩が次の言を発するより早く、サキ先輩は無言で

立ち上がった。

そして、それは一瞬のことだった。

「ゴメン。本当にゴメン。寂しいよな。期待してくれてたよな……。不満は、全部聞くから」

立ちすくむ私をすっぽりと抱きこんで、サキ先輩は彼らしからぬ低い声で私に謝った。

だけれど、そこで、私の中の何かが変わった。

「不満なんて、あるはずないですよ」

考えてみれば、私は、何にそんなに傷ついていたのだろうか。

サキ先輩に捨てられたわけでも、クリスマスと一緒にいられないわけでもなかった。

彼は、仕事が終わったらずっと一緒にいてくれると、そう言ったんだから、時間を重要視しない限り、何も不足はない。

「寂しいのは……サキ先輩も、おんなじ、ですよね？」

「うん。……それにさ、俺、店番してる中で、多分何度も誘われたりして、桃歌ちゃんを不安にさせちゃうかもしれない」

耳が生えていれば、ぺたんと垂れている、みたいな。

急にしゅんとして見えたサキ先輩の優しい睫毛に、私は柔らかく笑いかけた。

「だって、サキ先輩は、言ってくれましたから」

『俺には、桃歌ちゃんしかない』、と。

その言葉を信じるなら、何の心配も必要ない。

「ありがとう。あの、それで」

「サキ先輩のお仕事が終わるまで、誰かと一緒にお出かけしてもいいですか？」

すっかり気分が良くなってきた私は、先ほどの千種兄弟の笑顔が忘れられないのもあって、彼に聞いてみた。それ以前に、家族も友達も誘えるかもしれないし……。

「その話んだけど、さ」

少し焦ったような彼の苦笑に、私は首を傾げた。

「え、ええと……それは、いかなものでしょうか」

「でも基山チャン、家族も友達もアテがないんだろ？」

「うつつ……事実、ですけど」

案の定、部活に行つて水瀬先輩が部員にバラした私のクリスマス事情は、部内の謎の抗争的な事態を引き起こしてしまっていた。

家族や友達に、クリスマスの話をしたが、ことごとく逃げられてしまったのだった。誰もが私はサキ先輩と過ごすものだと思つているから……。

「平等つてやつだぜ！　じゃんけんなら俺も朝斗に勝てる自信がある！」

そして、サキ先輩や水瀬先輩、隼先輩までもが認めた案は。

「ルールは三つ！　？はぐれないようにするために手をつなぐ以外のスキンシップは禁止。？桃歌チャンも相手も、ご飯以外であまりお金を使わない。？松岡から電話があつた時点で終了。何があつても待ち合わせ場所まで桃歌チャンを送り届ける」

「勿論、了解だぜ？」

「え？　え！？　これ何のじゃんけんつか！？」

「最初はグー！　じゃんけんぽん！」

）　じゃんけんで勝った人が、桃歌とデート　（

X・mas2011 - 隼『兄じゃなくて』（前書き）

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

この話は、Blossom番外編「X・mas2011 - プロローグ」から繋がっています。

Blossom番外編「X・mas2011 - 水瀬『抱えた秘密の重み』」とは平行ワールドです。

「ひとまず、安心だな」

「は、ははは……」

一本目で一人勝ちを決め込んだ隼先輩は、そういう風に言っ
て私に笑いかけた。

「ま、理性が効くヤツトップスリーには入ってるから、安全ではあるかもな？ 隼なんかとデートして楽しいかどうかはともかくとして」

水瀬先輩の皮肉に、無言の睨みで返した彼を見て、私は少しだけ先行きが不安になった。

しかし、サキ先輩は安心していただきたみたいだし、それなりに良かったのかな……。

「お前、まさか本当に俺と一緒にじゃつまらないとか思ってるわけじゃないだろうな？」

「……そんなこと」

声色はいつもと同じに聞こえたのに、視線を送った先の隼先輩は、すねたように眉を潜めていた。

「妹たちのワガママ聞いて過ごしてんだ、黙っててもやりたい事、当てるよ」

得意気に口端を上げてそう言った隼先輩は、なんだか彼らしくもなかった。しかし、少しだけ感じた子供のような無邪気さに、私は心の中で笑った。

「おはようございます！ あ……」

「おはよ。ん？ そんなに珍しいか？」

私よりも先に待ち合わせ場所に来ていた隼先輩は、いつもとは全然違う服装に、髪型に、雰囲気、私は驚いた。

いつも真ん中で分けているサラサラストレートな黒髪を少し外側にハネさせて、オシャレな感じの髪型を作っていて、服装もいつもよりカジュアルな感じで、なんだか……。

「隼先輩じゃないみたい、です」

「はは。そうか、最近こういう風に出かけてなかったからな。ま、本命のために気合い入れてくるだろう桃歌に対して、いつものじゃ物足りないし、失礼だろう？」

その通りに気合いの入っていた私は、いつものポニーテールをゆるく巻いて、手慣れない化粧を少ししていた。

「化粧なんてしてるの初めて見たが……。なかなか上手いじゃないか」

私の顔を真正面から見つめて、隼先輩は目を細めた。

「ほとんど初めてみたいなですよ。今度、教えてくださいね？」

顔を合わせて話すことは少なくないと言えど、いつも他の先輩がいるから、ここまで隼先輩に直視されて話すことは少なくて。濡れた真っ黒の、犬のそれみたいな目で見つめられると、少しどきつとする。

「ああ。だが」

頭ひとつ低いところにある私の頭に、ぽんと手が置かれる。

不思議に思って首を傾げると、真っ直ぐに目を見つめられた。

「サキは、今のままの桃歌でも満足しているぞ？」

穏やかに、しかし核心をつくような彼の言葉は、私の頭の中で、色々な言葉や、私なりの考えと混ざって、一瞬のうちに消化された。

それは、だってもう、出会ってから何度も考えていたことで。

「でも、私」

今日だけは、隼先輩に諭されてばかりじゃないもん。

頭の上からどこかそうと触れた彼の手は、氷のように冷たくって、私は思わずそのまま握り締めた。

「もっともっと、自分を魅力的にしたいです」

私の、温かいとはいえないくらいの手の温度が、冷たい彼の手の温度と分け合って、同じくらいになった。

隼先輩は特に何も反応を見せず、すぐにさっと手を引っ込めて、いつもの目で私を見下ろした。

「そうだな」

何かを気にするように、彼は私に背を向けて、ポケットに手を突っ込んだ。

そしてそのまま、首だけこちらに向けた。

「行きたいところとかあるか？ なかったら計画通り進めるが」

「今のところありませんよ、隼先輩の思うようにどうぞ」

あの日、任せてくれ、というような態度だったから、彼はもう前を向いてしまっていたけれど、その背中に笑って声をかけた。

なんだか、最初は少し誇らしげだったのに、今は何か押し殺したようにいつもの冷静な隼先輩に戻ってしまった。

「了解。行くぞ」

また、もう一度私を振り返って歩き出した。

不思議な感覚だった。実際のところ、あまり彼と二人だけにいることは、部活中でもなかったから。

「隼先輩、どうしていつもこんな感じじゃないんですか？」

やはりカップルの多い、商店街の人ごみの中で、私は唯一頼りにできる彼にそう話しかけた。

「んー……。どう説明しようか。ま、あまりチャラく見られたくないっていうのもあるかな」

前を向いた横顔はそのままに、視線をちらと向けながら答えてくれる。

「……そうなんですか、意外です」

誰にどう思われようと気にしないタイプだと思っていた。自分自身なんだから、みたいな。

「なんでだ？ 俺は不良に憧れるようなどーしようもない女とか、不良な女とはあまり関わりたくないぞ」

少し的外れな解釈と共に、隼先輩は珍しく間の抜けた表情を見せた。

「そうじゃなくって。周りの人がどう思ってたようと、カンケーない、みたいに思ってるのかなーと思ってたんです」

どうしても、いつも上から小突かれたり、からかわれたりしているから、こうやって対等に話し合えるのが、少し嬉しいなあ、と思った。

隼先輩は安心したように頷いて少し上の方を見上げた。

「ああ、そういうコトか。……気にしてるよ。実質、うちの中で俺が一番目立つ立場にある。それにまあ、よく睨んでるとか言われるからな」

確かに、最初に目が合ったときは、睨まれたと思ってびくびくしてしまったりもした。

しかし、今、隼先輩がどんなに険しい顔をしていようと、怒っているのか、辛いのか、本当に睨んでいるのか、一目でわかる。

……やっぱり、もう半年以上も見てるからかな。

「でも、やっぱり今日みたいな方がかつこいいです。いつもかつこいいけど、今日はもつと」

軽い愚痴のような言い方で漏らした彼の細っぽい横顔を見ながら、そう言った。

「そーゆーコトはサキに言っちゃれ」

こちらも見ないで、隼先輩はまた、冷たいであろうその左手を私の頭に乗せた。

「ウソじゃないですよ？」

「……わかってるよ」

その答えを聞いたとき、いつもより冷たい彼の態度が、どうしてもなのか、少しわかったような気がした。その瞳の奥の困ったような色を見つけたから。

「隼先輩、今日はデートですよっ」

すっかり温めることを忘れて、冷えてしまった自分の手で、彼の

手をもう一度握った。

少し驚いたように目配せをした隼先輩は、呆れた顔で肩をすくめた。

「だから」

「たまにはいいじゃん、なんて気分で作ってるワケじゃないんです。隼先輩が素敵だから、一緒に歩きたいって、それじゃダメですか？」
驚くでもなく、硬直した彼は、十秒くらいの間、まばたきもせず、私と目を合わせていた。

「困ったもんだ」

いつもくるくるとまわる彼の舌が、少しつまづいたみたいに、上手く言葉が出ていなくて。

「あまりサキや 俺たちを惑わせないでくれ」

しっかり手を握り直してくれた隼先輩は、その女性のように白い顔を少しだけ赤くしているように見えた。

「サキ先輩はあんなこと言ってましたけど……。ヘンなコトしなきゃ、私はいい、ですよ」

「ま、危ないのは梢とか……くらいなモンだろ。自分で安全つつたって信用ならないか？」

すっかりいつもの調子に戻った隼先輩の言葉に、私は顔を上げると、彼は信じられないくらい陽気に笑っていた。

「すごい大きなツリーですねっ」

連れられて来た大きなデパートで、吹き抜け状になっている中心部を何階にもわたっている大きなツリーが飾っていた。

「ああ、すごいな」

隼先輩は、あの後吹っ切れたのか、肩の力を抜いて、いつもよりもずっと優しく笑っていた。

「あっち行きましょっ」

ワクワクしてきた私は、隼先輩の手を引いて、スキップ気味で進んだ。

「たまにはいいですねっ。思いつきりウインドウショッピングっていうのも」

「俺ははしゃぐお前を見てるのが楽しかったよ」

「なんですかあー」

もうとつくに手は離してしまったけれど、着飾った男女が二人。周りから見れば、恋人にしか、見えない……よね？

「ウチの妹たちと買い物行ってもつまらないからな。如何せん二人で以心伝心しすぎて、ほとんど無言だ」

「じゃあ私、妹みたいなものだったことですか？ 隼先輩がお兄ちゃん」

お兄ちゃん、と言った途端に、彼は笑い出した。

「これ以上、手の焼ける妹はいらないな」

よほどおかしかつたのか、笑いを堪えながら見下ろしてくる隼先輩を、私は睨み返した。

「相変わらず、お前に睨まれてもかわいいと思うだけだな」

「……え？」

今……今、あの隼先輩が……。

「今、あの……」

「そのマヌケた顔もかわいいぞ」

全然彼のイメージなんかじゃなくて、ええと、甘い……に分類される感じのキーワードを発して、優しく、ちよつと意地悪っぽく笑う隼先輩は、まさに別人で。

「そんなに驚くことか？ 今まで、サキが少なからず影響を受けるのはわかっていたから、言わなかったただけなんだがな」

急に、隼先輩が男らしく見えて、といいますが、ええと、ともかく私の心拍数が急激な上昇を始めて、今度は私が硬直する番だった。そんな私の心情を知ってか知らずか、彼は手を差し伸べて、紳士的に微笑んだ。

「さ、桃歌。少し休もうか？ 連れて行きたいカフェがあるんだ。」

お前、ココア好きだろう?」

「ココア……。はい!」

今は胃袋だけじゃなくて、心もしっかりつかまれてしまってます。

「おい、桃歌。さつきからどうした」

「……へっ!? な、なんでもないですよ」

「何かある、というか、何か喋れよ……」

デパートを出、隣に並んで歩く隼先輩を、どうしてかすごく意識してしまつて、落ち着くことができなかった。

特別、何か変わったというわけでもないのに、先ほどの彼の態度が、衝撃的で。

「お前さあ、部員のほとんどに尋常じゃないレベルで好かれてるのとくらい、わかつてるだろ」

「それは……薄々」

合宿の時に和真君に言われて、初めて考えたことだった。確かにヒップホップ部の部員たちは、誰しにも優しいワケじゃない人もいるけど、みんな私には優しくしてくれる。

でも、私は、みんなの気持ちには応えられないし……。

「それでも桃歌の相手がサキであることに不満を抱いているヤツはいないんだ。だから、お前とデートしたいだとか、そういうコトを思つるのはこつちのエゴだ。応えられないと思つてるかもしれないが、みんな、十分満足だ」

物わかりの悪い、泣き虫な子供をなだめるように、彼は淡々と述べた。

そうだ、そうなんだ。私は涙を流すことさえせずとも、「でも」を繰り返して、相手に答えを探してもらう、子供なんだ。

「私……。サキ先輩の気持ちに一番応えたいって思つんですけど、でも部員のみんなが好いてくれるなら、みんなの気持ちにも応えたいんです。サキ先輩が一番なのは、やっぱり私自身がサキ先輩を一

番好きだといって思ってるからで、けど、みんなにとって、私は「一つでも隠したら、その「what」を問うことになるから。私は、全て思っていることを口に出そうとした。

だけど、その問いを最後まで言うことはできなかった。

『私は、どのくらいの存在なんですか？』

答えを聞いたなら、揺らいでしまう、その一つの問い。聞くことなんてできなかった。薄々、そう、薄々気づいているから。

「お前の言いたいコトはわかる。だから黙って聞け」

口をつぐんでしまった私に助け船を出して、彼は自らそこに乗り込んだ。導くは、安全な岸まで。頼りがいのあるおおらかで優しい彼らしい、ぶっきらぼうな言葉だった。

「まずひとつ。たくさんやりたいコトがあるなら、その中で優先順位があるのは当たり前で、そもそも切り捨てなければならぬことがあるなら、優先順位の低いものから切り捨てるだろう。お前が直感でやりたいことをやればいい。二つ目。さっきも言った通り、お前について一人で勝手に悩んでるヤツもいるが、お前がどうであろうと、そいつらは不満はない。俺がこうして隣にいるからといって、サキのことを考えるなどは言わないだろう。三つ目。桃歌の存在自体がみんなにとって重要なんだ。……だから。お前が一番好きなサキのことを考えてくれ。桃歌が自分のやりたいことを優先できないなら、サキのことを考えてくれ」

すたすたと歩きながらたくさんのことを、これまたすたすたと早歩きで口にしていく彼に、置いていかれないようにする。そのくらい、何を思ってたか、私のことなんて気にしてないみたいな歩きだった。

だけど……彼の言葉は、私を本当に優先してくれるもので。もし、先輩の言うことが部員みんなに共通するならば、私がこんな風に悩んでいるのも、みんなにとって良いことではないだろう。

「こんなもんで納得できたか？ お前がサキを好きで、サキがお前を好きであるかぎり、少なくとも俺はこの考えを変えない」

隼先輩が立ち止まって振り返った背後は、小さなカフェの軒先だった。

「……はい」

彼は色々なことを、ちゃんと理解して上手に話すけれど、先ほどからの話の内容はずっと、とにかく私を安心させて、説得しようとするようなものだった。

「隼先輩、ありがとうございますっ」

情けない自分も何もかも笑えてきて、笑顔を向けると、彼もまた満足そうに笑った。

隼先輩が再度振り返ってドアを引くと、ドアについたベルが、かわいらしい音を立てた。

「おや。いらっしやい……彼女さん、じゃないか」

入ってすぐ、狭い店内のカウンターの向こうに座っている青年が、隼先輩に声をかけた。

車椅子？

「サキの彼女だよ」

さっぱりとして印象の彼は、柔らかな笑みを浮かべて、納得したように頷いた。

「なるほどね。……それで？」

「オレはコーヒーで。こいつにはココアを」

「かしこまりましたっ」

少し水瀬先輩と似たような、飄々とした感じ、けれど優しい雰囲気と丁寧な仕草に、紳士的な印象も受ける。

最初に違和感を覚えたとおり、これまた狭いカウンターの向こうで彼は車椅子を少しだけ動かしながら移動をしていた。

私の荷物やらを受け取って席を促す隼先輩に従いながら、その珍しい光景に釘付けになった。

てきぱきと動く手先を見ていると、隼先輩が料理を作っているときのことを思い出す。

「そんな見られても、照れはしないけど、少し申し訳なくなるな、

サキに。……どうぞ、お嬢さん」

大人びた、というか大人の微笑みでカップを差し出した彼に、どきどきしてしまった。

初めて直視したその瞳は、甘い色を持っていた。

あたたかいカップの湯気ごしに、彼の顔を隅から隅まで見つめてしまう。

「……それ、飲み物だからさ。飲んでほしいな」

「へ？ あ、は、はい」

見とれてたのかなと思うと恥ずかしくて、手元に俯いて息を吹きかける。

「あ……おいしい」

カラカラな身体に、温かくて甘いココアがじんわりとしみる。

思わず呟いた感想に、カウンターの向こうの彼が微笑んだ。

「どうも。それで、隼。こんな日に何か相談でも？」

「ああ。そこのお姫サマが、ちょっとね」

隼先輩にぴったりの真つ黒のコーヒーのカップを指で遊びながら、彼は私を向いた。

「え？」

先ほど解決したような気がしたのだけれど、まだ……。

「お嬢さん、サキのこと、好きなんでしょ？」

「……はい」

彼がサキ先輩のことをどれだけ知っているかわからなかったけれど、隼先輩と親しそうにしているところを見ると、おそらくそれなりに親密な関係なのだろう。

「じゃ、隼のことは好き？」

少しばかり衝撃的な問いに、私は後夜祭のことを思い出した。

『……嬉しかったよ』

様々な理由もあれど、私は、隼先輩を好き、と言った。そして、その理由の全てを彼に打ち明けてはいない。

「……はい」

おずおずと頷くと、彼はにつこりと笑った。

「その迷いこそが、愛情の差つてものだよ。形式的なものだろうと、きつとキミの行動は全て、今みたいにサキを優先するだろう」

「あ……」

そっか。そうだ。私はサキ先輩への想いには、迷わなかった。隼先輩に対しては、少なからず他のことを考えて、遮られてしまった。「そういうワケだ。それでもって、お前はそれでいい」

コーヒを飲み干した隼先輩は、安心したように温かく笑った。

「この後、どうする？ 行きたいところとかあるか？」

「えっと……。あの、プレゼント、一緒に選んでもらおうかなあと
思って」

彼はおかわりを受け取りながら、了解と頷いた。

ちようどいい温かさになったココアは、すっきりした心に、また少し違うようにしみこんでいった。

「うーん……。隼先輩なら、どんなものをもらったら嬉しいですか？」

「俺は……。俺は相手が気に入ったものなら、何でも。だが、サキはわかりやすい方が好きだろうな」

こじやれたアクセサリーショップの、なんとも言えない空気に緊張しながら、こっそりと隼先輩に声をかける。

「わかりやすいって……」

「ペアものとか。ああ、勿論お前の場合は、な」

少し奮発していいものを買おうと、たくさん貯金をしていたから、常識の範囲内なら大体買えるくらいの額は持っている。

「なるほど」

目の前にずらりと並ぶネックレスを眺める。思わず目を細めて見なくなるくらいにキラキラと輝いている。

二つで一つになる、対になる、ほとんど同じデザイン……自分で買ったことももらったこともないから、どんなものかいいのか全く

見当もつかない。

「ペアは、さ……。二つともあげて、一つサキから贈ってもらおうにするとか」

「そ、そうですね……」

そんなこと、私にできるだろうか……。

「それ、気に入ったならいいんじゃないか？」

つい手にとつてじつと見つめていた一つ。すぐくピンときて、運命的な出会いみたいな感覚を覚えた。

「いいと思いますか？」

「俺個人の感覚としてはいいと思う。それで桃歌が気に入ったならいいじゃないか」

頷いて、緊張でカクカクしながらレジへ向かう。

これで、もう全部安心……。かな。

「あと三十分で抜けられるそうです」

「意外と早かったな」

日も落ち始め、いよいよ恋人たちの時間、といった雰囲気になりつつある商店街をぶらぶらと歩いていたら、サキ先輩からメールが届いた。

サンタ服の風咲さんの写真を添付してくれて、とつてもかわいい彼女に、これは売れるなあ、と思ったりして。

「じゃ、そろそろサキのとこ行くか」

「はい。……隼先輩、今日はありがとうございました」

こっそり買っておいたお礼を、横を歩く彼のコートにそっと押し付けた。

少しの間気がつかなかった彼は、私の手元と顔を何度か見て、また呆れたように笑った。

「……全く。そういうのいいんだって。俺はもう一回礼をしなければならなくなるだろう？」

そして、驚いたことに、小包を持っていた私の手をそっとつかん

で、肩に腕をまわした。

「サキには秘密な」

そう耳元に囁いて、顔を近づけてきた。

「あの……っ」

熱い吐息がくすぐったくて、それ以前に、良いのか悪いのか判断しかねて、私は顔を背けようとした。

しかし、ぱつと目が合った彼の深い深い黒の瞳に吸い込まれるようにして、動くことができなくなってしまった。

頬に軽く触れて、隼先輩は身を離れた。

「はは。……俺には無理だな」

「えっと……はい？」

どきどきがおさまらなくて、私は真つ赤な顔のまま首を傾げた。

「お前とサキとの間に割って入ろうだなんて、考えられもしないってコト。ありがとな。今日は俺も楽しかった」

綺麗で、儚い笑み。見下すようなものじゃなく、色々な辛みをもくるんだ儚い笑み。

彼を知らない人は、あざとい、とも言いかもしれない。こんな場面、そんな表情を浮かべるなんて。

だけど、彼にとつて、普段のひんやりとした笑みと、今の笑みの違いは物凄く大きいもので……きつと、それを私に見せてくれるということは、彼は私に心を許してくれているってことで。

なんだか、ちよつと動物みたいだな、なんて思った。何でも器用にこなすし、間違っただけとは言わないし、とても完璧に見えるのに、そういうところで少しかわいらしさも感じる。

……こんな風に見ちゃう私も、彼の妹っていう立場にはなれないなっ、と思う。

X・mas2011 - 水瀬「抱えた秘密の重み」(前書き)

甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

この話は、Blossom番外編「X・mas2011 - プロローグ」から繋がっています。
Blossom番外編「X・mas2011 - 隼『兄じゃなくて』」とは平行ワールドです。

X・mas2011 - 水瀬「抱えた秘密の重み」

「っしゃー!」

「……………」

「な、何だよ」

「いやー水瀬はあんま信用されてないからなー」

「基山チャンはそんなこと思っていないよね?」

「えーっと……………」

綺麗なカーブを描く下のまぶた越しに見つめられて、少しウ、と押し負ける。

「安心してってくれて。俺は女の子が好きだけど、人一倍大事にもするからサ」

「もしもし?」

「もしもし。基山チャン、ちょっと予定変更」

水瀬先輩が、改めて待ち合わせ場所に定めたのは、私一人ではとつても行けないような繁華街の駅だった。

「じゃ、ホームのどつかにいるから」

降りるはずだった駅を通り過ぎ、そのままその駅へと向かった。

水瀬先輩と……。少しだけ、不安もあった。

だって、じゃんけんに参加した人の中では、一番、いわゆる「チャライ」人だったから。

いつも朝は一緒に登校したりするし、信頼していないワケでもないけど、彼は掴みどころがなくて、何をするかわからないのもまた事実だった。

隼先輩も多分大丈夫だろ、と言ってくれたけど、不安が残るのは仕方なかった。

電車を降りて、階段へ向かう人波に飲まれないように、どうにかホームに残る。

キヨロキヨロしながら先輩の姿を探すと、ふいに肩に感触を感じた。

「おはようさん」

「あ、おはようございます」

いきなり肩を抱かれて、急に上がった体温と心拍数でも、冷静に挨拶ができる自分に驚く。

やっぱりいつもの調子とは少し違った。だって、いつもは別にこんなこと毎朝してくるほどでもないから……。

「はは、早エーゼ？ ドキドキすんのはまだこれから」

完璧に決めてくる水瀬先輩の瞳から逃げることはできなくって、私はまさにヘビに睨まれたカエルの状態だった。

そんな私を見て、とりあえず身体を離れたが、その手は私の右手を掴って指を絡めてきた。

「あ、あのっ！」

「今日のテーマな、『疑似彼女体験』。恋人同士のデートで手、繋ぐのは基本中の基本だ。だろ？」

「でも」

サキ先輩に、ダメって言われてるし……。

それに、今日のテーマって、勝手に決められているけども。

「はいはいはい。俺さ、既に基山ちゃんの手繋ぐだけじゃなくて色々してるだろ？ それに今日は、この後のサキのために色々教えてやろうと思って」

私の相談に乗ってくれるときの優しい目で、水瀬先輩は笑った。

色々して……ないコトは、ないけど。

「サキ先輩に全部言っちゃいますよっ」

水瀬先輩には、一番使える脅しだと思って口にしたのだが、それに反して彼は鼻で笑った。

「俺にファーストキス奪われちゃったのも、デートに行かせちゃったのも、サキなのになー？」

「だってそれは水瀬先輩がっ」

むすつとして反論した私の鼻先を、彼はその長い指でつついた。

「だーから。それをただの『ワルイコト』だと思うか、反省して次に生かすような経験だと思うか。で、基山チャンが今後俺みたいなのに引つかからないようにってコト」

でも、水瀬先輩は、別に悪い人ではないだろうに。今まで、私が嫌だ、と言葉で否定したことは何一つやろうとはしなかった。

「サキにとつてはキミが正解だろ。だから、基山チャンの間違いを正しちゃくれない。だけど、それは隼はやってくれる。それで、俺は」

まだ眉間にしわを寄せて黙り込んでいる私に、懲りなく笑いかけ、彼は私の耳元で囁いた。

「キミに、夢を見せてあげる」

びくつと肩が震えた。驚くほどに色っぽい声でそう言った水瀬先輩が耳元から遠ざかるのを感じて、私はぱつと耳に手をやった。

「あの……。嬉しく、なくはないんですけど、でも私、サキ先輩に申し訳なくって」

勿論、カッコイイ水瀬先輩と仲良くすることが嫌なワケではなかった。彼の単純ではない素敵なところはわかつているつもりで、彼に裏切られたことといえただの一度だけだった。

「サキの縛る範囲だけで生きていけるほど、女の子は健気なモンでもないっしょ。こうして今、サキと基山チャンが一緒にいないのは、色々あれどアイツのせいだし」

まだ反論の余地はあったけれど、彼は黙って目尻を下げて微笑み、私の手を引いた。

「俺だつて女の子に不自由しないってワケじゃないんだから」
「……えつと？」

「こーんなカワイイ女の子とデートできて純粹に嬉しいってコト。俺のためにも、今だけはサキのこと、忘れようぜ？」

突拍子もないことを言い出した水瀬先輩についていけなくて、私はぼかんとしてしまった。それでも、言葉一つ一つから繰り出され

る押しは、だんだん強くなっている。

……甘えても、いいかな？ サキ先輩との約束、破っても。

「桃歌、おいで」

穏やかに笑って、初めて私の名前を呼んだ水瀬先輩に向かって、自然と足が進んだ。

それは魔法みたいな一瞬だった。

「結構歩いてるだけでも面白いだろう？ ああ、一人だと確かに心細いかもな。人、たくさんいるから」

「そうですね。でも、だからこそ来られる良い機会になりました」
ときどき、水瀬先輩が視線を受けているのを感じながら、私はすっかり彼との恋人繋ぎにも慣れてしまつて、見慣れない人ごみと町並みに心を躍らせていた。

なんだかんだ彼が親切でやってくれているとわかつていた。あれこれ考えずに楽しむ方が自分にも水瀬先輩にも良いことかなあつて
「なあ、俺がいつも『基山ちゃん』って呼んでる理由……あと、隼の『チビ』もかな、知ってる？」

「……なんですか？」

そういえば、部員は割とみんなそれぞれ色々な呼び方で私を呼ぶ。
「サキがな、最初の頃は名前呼んだだけで怒ったんだよ。琴みたいに変なあだ名つけるワケにもいかないし、まあそんなワケで考えた結果ってゆーコト」

「そ、そうなんですか……」

思ってみれば、最初の頃はサキ先輩はすごく過激だった。最近はある程度なら全然怒ったりしないし、その辺りのことで私が困るということもなくて、常識的に近づきつつあった。

「まあ慣れちゃったしな。でも、桃歌って名前、嫌いじゃないぜ」

「私も……水瀬先輩の名前、好きです」

女の子みたいに綺麗な響きで。他の誰とも似つかないような名前が、彼にふさわしいと思っていた。

乾いた笑い声を立てて、彼は私の身体をぐっと引き寄せた。

「そーやってお返しても褒めたりすると、調子に乗って、こう、ぱくつとやられちゃうぜ？」

顎に指をかけて、口の前で噛み付くフリをしてみせた水瀬先輩の仕草に、かなりドキドキしてしまった。キス、されるかと思って。

「あと。そのビックリ顔もむすつと顔も抱きしめなくなるからむやみにしない」

ドキドキというかドギマギに対応するのに必死で、目の前の彼をどこともなく見つめていて、全然神経の通っていない私の頬をつつきながら、水瀬先輩は余裕たっぷりに笑った。

「あ、な、からかわないでくださいよっ」

往來のど真ん中だったことを思い出して急に恥ずかしくなった私は、左手は前に押し出して、顔を背けた。

「考えなしに両手を出すと」

その左手はどこにも届かなくて、水瀬先輩の手にまとめて掴まれた。

「ほら、もう俺のモンだ」

「……………」

本気だったら、勿論、迷わず梢君にしたことをする。

でも、彼の場合そんなことないんだけど、どうにかしてこの場からなんとか抜け出したくもあった。

あれやこれやと思考していると、水瀬先輩は笑って手を離して頭を撫でた。

「はいはい。今、泣きそうな顔してるぞ。……んーと、キミに対して少しでも愛情があるヤツなら、泣いたら少なくともちょっとは怯む、かな」

水瀬先輩はちゃんと私のこと気にかけてながらこういうことを今してるってわかってるけど、やっぱり、ちょっと怖いし、ちょっと遊ばれた感じがして、嫌な気持ちだった。

泣きたくなんか、ないけど……。

「……あれ？」

何ともいえない気分であつた私を見て、水瀬先輩は少しの間黙っていた。そして、再度私の右手に左手を絡めて手を引いた。

「わかったよ。お姫サマ、暖かいところでちよつと話そうか」

呆れた風なんかじゃなくて、柔らかな彼の口調を全然、聞く気なんてなさそうな態度の私に、それでも彼は優しく促してくれた。きつと、素敵すぎる笑顔と共に。

へそを曲げて、親に引きずられている子供みたいに、私は口を結んで彼についていく。

だって、何を言えいいのかわからない。泣けつて言うの？、とか、どうすればいいのか、とか、どうしてか非難の言葉ばかり出てきて。

黙って私の手を引く水瀬先輩は、こうやって機嫌を直すのもお手のものなんだろう。だって、水瀬先輩だから。

もやもや考えながら、いつの間にか私は彼と向き合つて、ケーキ屋さんの椅子に座っていた。

「あの……」

どうしてこうなつた、と言わざるを得ないのは、あんまりにも私がぼうつてしていたからだ。

こじやれた店内で、こじやれた音楽が流れ、目の前には水瀬先輩。

「ちよつと話そう、つて言つただろ？ さっきは、ゴメンな」

肘をつき、目を細めていた体勢から、しつかり背筋を伸ばして座りなおした。

「うん、ちよつとばかり、桃歌のプライドを傷つけたかなと思う」

当たり前のように私を呼び捨てにする水瀬先輩に違和感を覚えて、プライドなんて……とまた自分の思考に沈んでいきそうになる。

「忘れてたわけじゃない。梢に脅されてキミかけ泣いたこと、葉山先輩に散々オモチャみたいに遊ばれて嫌な気分を味わったこと。……

むしろ、忘れていてほしかったくらいだった。でも、そんなワケ、ないよな。 なあ、今まで自分が傷ついたことを全部認めて、覚

えているか？ 辛くないって思うのは強さかもしれないが、弱さを認められない弱さでもある。そして、思いがけない場面で、否定もできないような衝撃を受けたときに、混乱して崩れてしまう」

最初は静かに淡々と語っていたが、何かを思い出しているのか、後半は朗々と文章を読む役者のように、重たく厳しい言葉だった。

彼は……どんな経験をして、そんなことを思うの？

いつもの明るい笑顔の裏には、やっぱりの重たい事実を隠しているような気がして、私は自分自身に投げかけられた言葉よりも、水瀬先輩のことが気になってしまった。

だけど。この場を与えてくれたのなら。

「正直に言っても、いいんですか？」

私が忘れられない、傷。今でもずっと、気にしてしまうコト。

彼は長い睫毛で少し瞳をふさいで、それでも優しく微笑んで頷いた。

「水瀬先輩がファーストキスでした。でも、そのすぐ後に先輩が他の人とキス、してるの見ちゃって……。あの、理由が知りたくて」

あのときは少なからず何かを期待してはいたかもしれないけど、今となつては、彼がどうして頼んでもいないのに私にキスをしたのか。それが知りたいだけだった。

目の前の彼は、何とも言えない表情でひとつ溜め息をついた。

「それ、か……。それに關しては……。えーっと、機会がなくて謝れなかったけど、ホントにごめんなさい」

『あの』水瀬先輩が、手を合わせて、頭を下げた。

それに、言葉に詰まっいて。

「？ ……はい」

「理由は言えないけど、とにかくごめんなさい。完全に俺のせいだ。桃歌はサキからかばってくれたけど……」

冗談みたいに素直に謝った彼に、正直戸惑った。そんなことよりも、だって、理由が知りたくて……。

「あの、どうしてですか？」

謝らなくてもいいのに、と首を傾げながら問うと、彼は肩をすくめた。

「言ったらもつと傷つくと思う。し、俺には言う権利はない、カナ……」

「権利？ サキ先輩が関わってるなら、私が保障します」

個人的なことと言いたくないなら追及はしないけれど、だって、彼は多分私に気を遣ってそんな風に言っている。

「……もう知らないぜ」

少し熱くなつて食い下がる私に、彼はもう一度溜め息をついた。

「その……。怒ると思うけど、正直に言うと、『したかったからした』」

「……………」

「で、なんか勘違いされてたみたいだけど、前後はあれど付き合ってたコトある子以外とはキスしたことない。桃歌？」

わ、たし……。どうしたんだろう。水瀬先輩の動機を聞いて、本当は、すぱっと諦めたかったのに。

うつむくことは、なんとなく悔しかったからしなかった。けれど、机の上に置いた拳を、爪が食い込むくらい強く握り締めていた。

「……………続けてください」

「キミの中学時代の話聞いて、そのときの桃歌とサキと色々考えてたら、急に、ね……。こんなこと言いたくないけど、桃歌に引きずらせることになるならしなきゃよかったとも思ってた後悔してる」

「じゃあなんでしたんですかつ」

後悔してくれなくなつていい。私は別に、彼とキスしたこと自体が嫌だったとは一言も言っていないもの。

「なんだろうーね、俺……。サキにやりたくなかったのかもな。少しだけ悔しかったし、サキを応援しようとも思っていたけど、キミみたいな女の子は珍しかったしな。こういう反応するのか、ちよつと気になつてた」

気がつくと、水瀬先輩は見たこともないほど真顔で、どこも偽っ

ていない声色だった。

「……最低ですね」

「自分でもそう思う。打ち明けたからには、俺は桃歌に何でも償うよ」

私が、一番辛かったのは。

彼が私のことを弄んでたんじゃないかってこと。私は他の女の子と全く変わらないんじゃないということ。……でも、これらは、ほとんど否定された。

私に水瀬先輩を許す義務はなくて。だけど、私は彼のことが嫌いじゃないから、すつきりしてまたいつものように話し合いたかった。

「さっきのは……。水瀬先輩は、好きな子としかキスしたことないってこと……ですね」

「ああ。何？ 桃歌、サキだけじゃなくて俺の愛情も欲しいの？」

いきなりふざけたした彼にちよつと怒りを覚えて睨みつけると、笑って誤魔化した。

「甘えてもいいですか？ ……忘れたいんです。重たいあの日のファーストキスも、水瀬先輩が他の子とキスしてた場面も」

何を言っているのかわからなくて。私は、水瀬先輩といるとき、きたま、こんな風にサキ先輩に感じるのとは違うドキドキを感じる。胸が、苦しい。

「……機嫌直してくれたってコト？」

「わ、たし……。正直に言うとおの時は、先輩に期待してました。だって、初めてのことだったから……」

こういう言葉で弁解をしたら、彼の性格なら、どんな状況でも慰めてくれるって半分くらいはわかってた。だけど、ちゃんと彼は私の頭を撫でて優しく笑った。

「わかったわかった。桃歌が素直に全部言ってくれたの嬉しかった。俺も……。なんだ、その。余裕ありげな演技で困らせて、ゴメンね」

「え……？」

演、技。確かに、そういえば先ほどの話だと、あの時の彼の態度とは矛盾するようにも思える。

文化祭の演劇でもとんでもない演技力を見せ付けられたし、彼の冗談はたまに冗談とは思えないこともある。だけど……。

「そ、演技。バレてなかったからあんま言いたくないけど、よく演技で誤魔化してるから、そこんトコ、気をつけてね」

「え、えええ……」

……ん？ ということは、演技が余裕ありげなら、本当は余裕がなかったの……？

「俺な、たまーに本気でキミをどうにかしたくなるんだよね。どうしてか、ね」

そういう風に言う水瀬先輩は、なんだか……。穏やかで、子供を見守るようなまなざし。よく見ると、頬が少し赤いような。

「みなまで言うなよ。……わかってるから。俺、他の奴らと一緒にでさ、桃歌にちょっと惚れちゃった。キミが良ければ、さ。あの時のことなんて全部忘れるくらい、今日は楽しませてあげるから」

「え……」

私も、多分真っ赤だった。だって……一番ありえない人に言われてしまった。

水瀬先輩、最初の頃、一番私に冷たかったのに。

「からかったとき、桃歌が赤くなってるのを見るのが楽しいんだよね。余裕ないクセに、必死に色々考えてどうにかしようとするのが、天敵につかまった時のウサギみたいでさ。……ま、そんなワケで。今俺はサキに立ち向かおうとは思えないけど、かなり桃歌の見方だぜ？ だから、嫌なヤツにつかまったりなんかしないよーにレクチャーする。OK？」

少しだけの間を置いて、私はゆっくりと頷いた。なんだって……私はドキドキしてたから。

「まあそんなワケで、ココはケーキ屋だ。とりあえず何か食べよう

か」

「ふふふっ」

おいしいケーキにおいしい紅茶、そして水瀬先輩とのしがらみがほとんどなくなったことによって、私は笑みを隠せない気分だった。「変な顔。ニヤけてんぞ」

右手はしっかり指と指を絡めてつないでいる。さっきまで何を考えているのか全然わからなくて、甘えすぎても申し訳ないと思っていたのだけれど、私は彼のことが少しわかったような気がした。

言葉は素直だけど、ちよつとぶつきらばうなのは他の人と変わらない。

「本心じゃないってわかってるから、傷つきませんよ？」

「参ったな……。桃歌、機嫌が良いか悪いと、かなり悪女になるよな」

呆れながらも微笑む彼は、ちよつと前までの水瀬先輩とは違って見えた。

「……水瀬先輩ってホントは、全然軽い人なんかじゃないですよね」「どーだろうね。ま、女の子は大事にするよ？ 師匠の教えだからな」

ううん。はぐらかされてる。だけど彼はまたちよつとずつ自分のことを口にしたるもする。

「師匠ってなんなんですか？」

「俺の過去、気になっちゃう？ あんま話したくないから話さないけどね」

いつもの飄々とした態度に戻ってしまったけれど、どこことなく彼もいつもより機嫌が良さそうに見えた。

「それより、あそこで何かやってるのか？」

水瀬先輩の指す方向を見ると、交差点の脇の広場に一際人が集まっていた。

「わっ……」

やはり人の注目を集めるその方向に人が流れていて、背の高くない私はすり抜けようとする人につられて向こうへ流されそうになった。

しかし、ぐつと強い力で腕を引かれて、柔らかいコートにボフ、と当たった。

「危ない危ない。……なんだろうな？」

水瀬先輩には何てこともないのかもしれないが、引き寄せて守ってくれたことにドキドキした。しかも、今の状況は、私の背中まで彼が腕を回して、抱きとめられている体勢で。

「……ん？ あれ」

真つ赤な顔を見られないように努力したけれど、彼に額をすつと押されて顔を上げると、きょんとしている彼と目が合ってしまった。

途端に口端が弧を描き、目が細められた。

「ホント、面白いな。……今、何考えてる？」

水瀬先輩には、こういうとき私が脳みそフル回転でどうでも良い事を考えているのがバレているんだった。

「み、水瀬先輩の、コト……」

素直に言ってから後悔した。にやけていた彼が、もつと意地悪そうに笑ったから。

「今の台詞、サキが聞いたら、俺の命が危ないな。ま、サキと歩いててもどうせ部活のこととかも考えてるんだろ。 桃歌って案外

頭は回るよな。他の子みたいに目の前のコトでいっぱいじゃないから、なんか難しい」

「十分にいっぱいはいですよっ」

彼の言葉一つ一つが気になってしまふほどには。別に関係ないけど、今まで水瀬先輩がどんな子と付き合ってたのか、とか……。

「ふーん……？ で、あれ、なんなんだろうね」

疑いの眼差し、というより、多分わかっててからかってるんだろうけど、彼はそんな態度をとって、しかし私を抱きしめたまま、再

度先ほど指差した方向に向いた。

人ごみに隠れてて私には全然何も見えなかったけれど、彼は何か見えているようで、口を結んで目を細めた。

「んー……こんな日に、なんか撮影してるっぽい。こんなに人集まってるちゃ、迷惑だろーに」

認識した途端、興味をなくしたように声のトーンを落とした。

そして、私も少し向こうを見ようと努力していると、ふと彼が咳きを落とした。

「……桃歌ってテレビ見る？」

「えーっと……あんまり」

正直に言つと、家では何もしないでぼーっとしている方だった。

勿論、部活や勉強のことはそれなりにこなしてから、だが。

「そっか。俺、実は子役やってたんだよ」

「え？」

唐突な問いに、唐突な話題だったが、彼から、こういう風に意外な過去とかを話してくれるのは初めてだったように思った。

「ちょっとただけだね。やりたいコトできたからやめちゃった」

茶目っ気を含ませて、彼はウインクをした。

さっき言つてたみたいに……演技しちゃうクセとか、そういうところから始まつてたんだろうか。

「やりたいコトって、やっぱり……」

「ダンスは高校からだ。中学生の頃までは歌手になりたかった」
急に、彼がとても子供みたいに見えた。悪い意味じゃなくって、夢見る少年のような。今まで、そういうところは全然見せていなかったから。

そっか。だから歌があんなに上手なんだ。

「でももう、諦めたっていうか、ホントに音楽好きな人には勝てないなーって思ったら、趣味だつてコトに気がついてさ。今はもう何にもない」

その言葉にウソはなさそうだったのだけれど、ちょっとだけ心に

引つかかるところがあった。

後夜祭で、歌とダンスでステージに上ったのは、まだやりたいって気持ちがあったからじゃないのかな？

「それでも、水瀬先輩は人前で何かするのが好きそうですよ」

「……そう見える？ そっか。諦めきれないのかもな」

部活のときだってそうだった。パフォーマンズという点において、彼は一步も引かないところがあった。

珍しく、少しだけ悩んでいる感じの表情を見せた水瀬先輩は、やっと私の手を引いて、人ごみから抜けた。

「ま、そーいうの目指したくなっているわけじゃないんだけどさ。なんとというか、そんなに強く決意できないんだよね」

私から見れば、彼は割と何でもそつなくこなすし、世渡りも上手だから、今からでも芸能人にはなれそうなものなだけけれど。

「私は、何か、行動を起こしてからホントの気持ちになるってこともあると思います」

言うてから、気がついた。サキ先輩と私の関係と……同じ？

水瀬先輩もそのことに気がついたのか、私を見て笑った。

「……そうだな。それを言ったのは俺、だしな。モヤモヤしてるだけ、時間は無駄だつてもんだ」

自嘲なのか、私を少しだけ揶揄しているのか、しっかり目を合わせておかしそうに微笑んでいた。

「そんなワケで、今、俺が桃歌と一緒にいるのに、自分のコトばかり話してるのもあんま効率の良い話じゃないな！ さて、寒いしどつか入ろうか」

さっき演技がどうか話していたのがウソみたいに、彼は素直に気持ちを表現しているように見えた。

最初に会ったときよりも、ずっと、彼は私に心を許してくれている気がする。

今思えば、一番自分を保護している殻が堅いのは水瀬先輩だったかもしれない。

「さっきの続き。サキにアプローチするなら、手だけじゃなくてもっと近づいてもいいと思うぜ。もーアイツはさらにゾッコンだから、何やつても許されそうだし」

そう言つて腕ごと絡めてきたのは水瀬先輩で、それこそ許されないんじゃないか、なんて思った。

でも私は、彼が私のために行動してくれてるって確信が持てたから。

ホントは心臓に悪いからちょっと嫌だけど、完全に拒むことをできそうになかった。

「そーいえば、海の帰りに桃歌、俺に引つついてきたよな？」

「……へっ！？　　そ、そーいえば」

あのときはちよつとばかりはしゃいで興奮してたから、その……微妙に我を忘れていた、というか。

「あーゆーの、あざとく覚えてる俺みたいなのに気をつけなよ。…

…ほら、梢とかは多分自分がしたことしか覚えてないから大丈夫だろうし」

どういふ基準の判断なのだろうか。それに、梢君はきっと私がした酷いことを忘れていくということはないだろう。

「本人が忘れた場合、切り札になり得るんだよ。お前、あの時こんなことしただろーとか。話に脚色したってバレないし。責任を追及するワケじゃなくってさ、一線を無理やり越えさせるといふか」

「は、はあ」

……だから、私はあなたと腕を組んでいいことにはなりませんよ。「そ。だからさっきの俺の過去の話とかさ……。秘密にしてるコト、あんまり興味本位で聞くと、戻れなくなるよ？」

水瀬先輩は、ミステリアスなキャラを演じているわけではないけれど、何だかんだ色々なことを秘密にする。

よく、それっぽいウソについて本当のことを隠したりするし、はぐらかすし。

でもそれってもしかしたら、その責任の重さを背負わせないよう

にするための気遣いなのかな、とも思った。

まだ彼についてわからないことは物凄く多いけれど、きっと、水瀬先輩は、上手く一人で様々な人を守っているのだと思った。

「……ま、桃歌もたまに使うよな、この手」

「あは、は」

思い当たる節がないワケではなかった。好意を伝えられたことをいいことに、サキ先輩とのケンカに利用したりするし……。

「それでいいんだよ。サキのことはもっと困らせてやれ。アイツはホントにヘタレだから、もっと強くなないとイケねえと俺は思うよ」

水瀬先輩式の恋の駆け引き、か……。

余裕たっぷりの視線を向けて、彼は私の腕を引いた。

彼とのデートで得られることは、別に、ワンステップ上の体験とただけではなさそうだった。

千種 琴吹 history「追っかけ続けた背中」

中学二年生の夏、俺は最初の恋と、最初の失恋を経験した。

「ねえねえ千種君、朝斗先輩のアドレス教えてよお」

「ゴメン！ それは止められてるんだよね」

俺の出身中学校には、サキみたいなずば抜けたイケメンはいなくて、何故か、とは当時は思っていなかったんだけど、朝斗は物凄くモテていた。

朝斗は今は俺と同じくらいだけど、成長するのが早くてちよつと背が高く、俺の学校ではすごくテニスコートが目立つところにあるんだけど、それでテニス部だった。今もそうだけど別段頭が悪いということもなく、実際お兄ちゃんんだけど、お兄ちゃんキアラで面倒見はいいし爽やかで、テニス部の女の子から人気は広まり、彼が中三になる頃には一つ下の俺の学年にまでそれは伝播していた。俺は今と大して変わなくて、男の子とも女の子とも仲良くしてたから、よく女の子に朝斗のことを聞かれたりした。当時の幼稚な俺としては、それで女の子と話せるだけで、ちよつとした得をした気分だったな！。

昼休みに、教室の外の廊下をふつと朝斗が通つたのをきっかけにするように、クラスの女の子が俺にお願いしてくる。

「じゃあ好きな子とかいるのっ？」

「んー……。はっきりは聞いてないけど、いるとは言っていないな」

今日帰りに聞くか。そんな風に思っていた。

テニス部は夏明けまでは三年もやるし、部活があるなら一緒に帰っていた。今と同じで結構仲良くて、恋愛相談とかそのくらい突っ込んだ話も包み隠さず二人で話したりしてた。

「そつかあ。ありがとう！」

そう言ってかわいい笑みを向けてくる女の子に、俺も思わずはにかむ。

朝斗　　当時はまだ朝兄って呼んでたっけ、はモテていいな。ずっとそう思ってた。

背の伸び方は全然違ったけれど、幸い顔や体型は似ているし、俺はいつしか朝兄を憧れにしていた。

そうそう、今物凄い大食いになっちまったのも、早く背、伸びたいなーと思っで、たくさんおかわりするようになったのが始まりなんだよ。

今も朝兄には勝てないなーとは思っけど、当時の憧れようは半端じゃなかった。

同じ床屋に行っで、同じ服を買っで、テニス部に俺も入った。

テニスが結構上手い朝兄に追いつきたくて、俺も必死に練習した。テニスは楽しかったけど、結局朝兄を追っかけるのをやめたらもうやめてもいいくらいのものだった。

さて、あんまり現在の俺が過去を語る、って風に書くと、なかなか時間軸も混乱しやすいだろうから、俺の初恋と失恋に関わる数日間だけ、そのときの気持ちになっでみようかな。

「朝兄！　お疲れー」

「おー、琴もお疲れ」

部活が終わっで、ラケットバッグを背負った朝兄を見つけて、急いで駆け寄る。

いつも置いてかれはしないけど、結構俺のこと待ってはくれないんだよな。

「日イ、長くなっただな」

部活が終わった後でもまだまだ高い太陽を見上げる。

夏が深まっていくということは、朝兄たち三年の引退も近いということ。

「来年お前が頑張れるくらい良い成績とってやる」

俺が朝兄を目指して頑張ってることを知って、彼はそんな風に冗談めかして言う。

俺にとつて、朝兄に追いつくこと、それにしか意味はないのにな。

「朝兄、あのさ」

「なんだ？」

昼休みに、帰り聞こうと思ったことを問う。

笑って首を振ると思っていた彼は、一瞬ビツクリした顔をして、

顔を赤くした。

「実は、いる」

「……マジかつ」

聞いた俺も驚いて、照れる朝兄と、何とも言えない気分で愕然としている俺との間に、微妙な空気が流れる。

「相手は？」

そ、そうだそうだ。これを聞くべきだ。

聞くと、彼は困ったような顔をして首を傾げた。

「知ってるかな。三年の、笠原 美佳って子」

「……え」

俺は、その人のコトを知っていた。

明るくて、透明、って言葉が似合うくらいキラキラしていて、綺麗な女性。

去年同じ委員会になって、実は今年も、だった。

朝兄が、ミカ先輩のこと……。

「知ってるの？」

「ウン、委員会で仲良くしてもらってる」

俺がミカ先輩と今年も同じ委員会だというのは、偶然なんかじゃなかった。

次も同じ委員会をやる、と言っていた彼女を信じて、俺もまた同

じ委員会に立候補したまでだった。

「まさか、お前が笠原のこと好きってことは」

「ないない！　ただ先輩として俺が懐いてるだけ」

……初めて、俺は朝兄にウソをついた。

多分バレてない。俺はいつしか、彼女が喜ぶようにといつも浮かべていた笑顔を浮かべていたから。

俺は、ミカ先輩のことが好きだった。それも、初恋。

いつ告白しようとか、早くどうにかしなきゃ、とか、考えるのが少し怖かったのかもしれない。

でも、朝兄が彼女のことを好きで、彼女が朝兄のことを気に入るならば　いや、きつと気に入るだろう、俺はそれもいいと思った。「っていうか、コレ、琴にも秘密にしたよな、ゴメン」

兄弟の間で隠し事なし、っていうのは、暗黙の了解となっていたから、朝兄は素直に謝った。

だから俺はそんな、大好きな兄貴の照れ顔を責めることもできなかったし、口をつぐんだ。

「琴吹君ってお兄ちゃんとそっくりだよな。あ、琴吹君の方がちょっとちっちゃいか」

「背、気にしてるんですよー？」

冗談めかして笑う彼女は、そう、ミカ先輩。

週に一度の委員会は黙っていてもやってきて、俺は彼女と会わなくちゃいけなくなる。

それが嬉しいけれど、どこか苦しくもあつた。いつそのこと、朝兄が早く告白してくれれば、俺は恋人の弟として、それなりの立場にもなれたと思うのに。

「ねね、琴吹君さ、私の相談聞いてくれる？」

「なんですか？」

机に両肘をついて、その綺麗な両手で頬を包み込み、笑う。

ああ、どうしてこんなにも綺麗なんだろう。こんなに綺麗なら、むしろ朝兄と同じくらい人気者ならよかった。

「……今一応委員会中だから、この後、ちょっと残ってもらってもいいかな？」

聖母のような微笑みを向けた彼女に、俺はこくりと頷いた。

「あのね、ちょっと言いにくいんだけど……」

『私、千種君　朝斗君が、好きなの』

薄赤く頬を染めた彼女は、夏のガラガラとした太陽の下でも、みずみずしい美しさで。

そしてその様は、あの日の朝兄と重なった。

俺の初恋は、自分から手を放すまでもなく、終わっていた。

「それでね、告白しようと思うんだけど……」

「絶対上手くいきます！　だから早く告白した方がいいですよっ！」

俺は彼女の手をとっていた。自分でも何が何だかわからなかった。そしていつものように、彼女の喜ぶ笑顔を向ける。

きつと泣きそうなことなんてバレない。朝兄にもバレない作り笑いを、この人が見破るはずない。

しかし、彼女はどうか戸惑ったような表情を見せた。

それを見て俺はいてもたってもいらなくなり、適当に理由をつけてその場を去ってしまった。

大好きな二人が幸せなら、初恋が失恋だって、別に構いやしない。元から自分は樂觀的な性格だと思っていたが、心は冷めているのか熱しているのか全くわからなかった。

何故なら、頬は熱かったのに、脳は冷静で、しかし言動はおかしかったから。

それから一週間が経って、また委員会がやってきた。

色々考えることはあったけれど、俺の気持ちはあの日からどう

してか変わっていなかった。

朝兄とはほぼ毎日話すけど、そういう話もう一切していなかったし、これ以上暗い気持ちになるまいとした。

俺はミカ先輩を見つけた途端、俺には何事もなかった、むしろもっと応援しようと思って、笑顔で駆け寄った。

「ミカ先輩、こんにちは！」

「琴吹君。あのね、私……」

『一応委員会中だから、これで。明日の放課後ね、朝斗君に告白しようと思ってるの。テニス部オフでしょ？』

彼女はさつと手元にあつたメモにそう書いて俺に渡した。

俺の笑顔は、引きつっていなかっただろうか。

自分で応援する、と決意していながら、着々と近づく初恋の終わりに、俺は胸が引き裂けるような思いだった。

『場所はどこにする予定ですか？』

『テニスコート裏』

テニスコート裏、か……。そこなら、オフの日は誰も寄らないし、テニスコートの側の並木のおかげで校舎からも見えない。

『頑張ってください>ワ<』

特別綺麗とは言えない文字で、ひとしきりの戯言とも言える応援を書いて、俺はミカ先輩と目を合わせて笑った。

もう、どうとでもなれ。

そのとき、自分の気持ちや何やら、投げ出してしまったのが、俺の弱さだった。

それなりに平穏な学校の中では、かなり突出している不良どもの集団が、何度も『テニスコート』と口にあること。机に伏せて、俺は聞いていたんだ。

しかし、その単語で思い出すべきことに、俺は一時的に靄をかけていた。嫌だった。経過なんて見たくなかった。三日後くらいまで眠

って過ごして、幸せな状態の二人と、何事もなかったかのように笑う自分。それだけが欲しかった。

そして、ぼうつとしていたのもいけなかった。最悪の場面に直面してしまった俺にとって、何が正しいのか、わからなくなった。

視界が歪むのは、夏の厳しい日差しのせい、目の信じがたい光景のせい。

きつとどちらも、だろう。俺にとってはその理由なんてどうでもいいことだったけれど。

どうして俺は、部室に寄ろうなんて思ってしまったのだろう。そうだ、シューズだ。朝兄がシューズを忘れたと言っていたのを、働かない頭ながらに思い出してしまったのだ。

それも、本当はウソなのかもしれない。

夏の窓辺で少し眠った俺の喉がカラカラだったのは当たり前だったけれど、その時だけはそれが眠ったせいだとは思わなかった。

「朝兄……」

テニスコートの側の、イチヨウの並木の作る日陰の下に倒れているのは、ずっと俺が追いかけていた、兄貴。

先ほどからセミの鳴き声にかき消されている泣き声は、誰のものか。

わかつてはいた。この場所に来てしまったときから。

ミカ先輩は、部室の扉の前にぺたんと座り込んで、俯いていた。

部室の扉は乱暴に開けられていて、ラケットとボールが数個散乱している。

うつぶせに倒れる朝兄の肩に手を置いた。

そこで、俺は気がついてしまった。俺の憧れは、途切れた。俺の憧れは、本当の正義にはなれなかった。

いや、違う。俺が悪い。俺がミカ先輩や朝兄を止めれば、こんなことにならなかった。

しかし、どうして止めなかった……？ 朝兄ならば、大丈夫だと思っただからか？

そうかもしれない、と、何故かそう思った。そうすると、俺の憧れは、こんなにも っ！

「朝兄……起きろよっ！ 朝斗！ 朝斗お……っ」

彼なりの正義を突き通したとしても、それは俺が望んでいたものではない。

目の前の男は、俺が彼の立場ならば、必死にしようとしたことを、放棄した。そうとしか、考えられなかった。

俺の怒鳴り声と、ミカ先輩の泣き声、そして夏らしいセミの鳴き声だけがその場所に延々と残った。

「琴吹君、朝斗君、ごめんね……」

「俺が悪いんです。俺、知ってた……アイツらが来ること」

なのに、全て放り投げて。無責任にも程があつた。二人の幸せを願ってなんていたというのに。

「お前のせいじゃねえ。俺、アイツらを前に何もできなかった。何もする勇気が起きなかった。……それだけだったってコト」

ほら、やっぱり俺の知っている兄貴の信じる正義は、そういうものじゃなかったんだ。なのに、彼はそれを突き通せなかったんだ。

自分の憧れが不完全だったと気がつくのが、怖かった。俺の中で

朝兄は、一番だった。今となつては朝兄だなんて 彼は、朝斗、だ。

「だから、ゴメン。笠原、俺は付き合えない」

「わたし……もっ。だから」

朝斗は、ミカ先輩を抱きしめていた。

悔しさに歪む顔を、見られなくなかったのか、彼女の言葉を聞き取らなかったのか。

どうせどちらもなんだろう。自分に悔しいままに、自分の気持ちを実現したくなんてないんだ。

「この前の兄貴の仕返し、ちゃんとしなきゃな」

「はっ、俺たちがお前みたいなチビに負けるとでも思ってたのか、ああん？」

俺は心の中でほくそ笑んだ。この展開は、いける。

そして俺は、俺なりにきちんとケジメをつけた。

俺のクラスの、朝斗をボコつたらしい不良軍団を、全員ボコリ返してやった。 テニスの授業のシングルスで。

「まぐれだ！ もう一回やれ！」

「放課後テニスコートに来いよ。ダブルスでも振り返ちにしてやるよ」

悔しそつにするヤツらに目掛けてスマッシュを打つのは、爽快だった。

これで、俺は朝斗とひとつ差をつけた。アイツらに臆せずに仕返しをできた。

ミカ先輩はまだ朝斗が好きだったらしいけど、朝斗はあんな情けないところ見せて、やっぱり付き合えないと言った。

俺はなんか、そんな二人を見てたらもう初恋なんてどうでもよくなってしまった。

今はそれよりも、朝斗という壁をひとつ越えられたという、喜びだけ。

とまあ、俺の初恋の話はこんなもん。

ちなみに朝斗は、ラケットでガチにぶん殴られたせいで一ヶ月くらい学校を休んでテニスの引退試合も出られなくて、でもアイツは不良たちのせいにはしなかった。

朝斗のカメラ趣味が始まったのはその頃くらいからだっただけ、

ま、俺はその辺あんま知らないな！。

実はさ、俺、高一いっぱいくらい、またサキに同じくらい懂れてさ。

でもな、桃ちーに一生懸命なサキ見てたら、やっぱり冷めちゃった。

俺って案外、冷静なタイプなのかな？ なんちゃって。

新しい恋を探す　なんて言ったら大げさだけど、なんかそういう感じに色々考えてるうちに、他の人の真似すること自体がカッコ悪いって気づいた。

だからな、俺は俺だし、っていうかむしろ朝斗と似てるって言われるなんて屈辱……って言ったら言いすぎだけど、嫌なことなのかなって。

これからは、俺は俺として、『俺』を作っていけたらいいなーって。

誰もが認めるような、『千種　琴吹』ただ一人をさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349ba/>

Blossom番外編

2012年1月5日23時48分発行